

防災イメージーション向上と共有のための一手法の検討 —地震および保育園を事例として—

東京大学大学院 学生会員 ○阿部 真理子
東京大学生産技術研究所 正会員 目黒 公郎

1. はじめに

保育園等では、地震や火災等の災害に対し、以前より設備点検や毎月の避難訓練等の対策がとられてきた。また、近年の動向として、乳幼児への防災教育に関する取り組みも行われだしている。しかし、行うべき防災対策の全体像を考えた時、これらの訓練や教育は限られた一部を扱っているに過ぎない。また、訓練や教育で想定している状況には、様々な面で災害発生時に起こりうる状況とのズレや偏りが存在している。例えば、保育園で一般的に行われている地震時避難訓練は、時系列のフェーズは地震直後、対応行動の種類は避難に偏っており、余震は考慮されていないことが殆どである。そもそも、保育園において避難訓練を行える状況は限られており、散歩中、食事中、午睡中など、地震が発生すると対応に困る状況ほど訓練実施が困難である。そこで、保育園関係者内（保育園勤務者、保護者、その他の関係者から構成される乳幼児の守り手達）で、個人から集団に至る防災イメージーション（「適切な防災対策を行うための災害状況の想定力」と定義）を形成することが、既存の防災対策を見直し、避難訓練や対策を再検討するために重要となる。

本研究では、保育園における既存の防災対策の再検討を目的として、保育園の個人から集団に至る地震防災イメージーションを形成するためのワークショップの設計と実践に取り組んだ。このワークショップでは、まず地震発生時の状況に影響を与える諸要因（特性）を考慮し、各々の参加者が「目黒巻」と呼ばれる細長い記述用紙に自分を主人公とする災害発生時の物語を時系列に沿って記述する。この作業により、記述者の防災イメージーションが形成されると同時に、疑問や不安、課題も顕在化する。そ

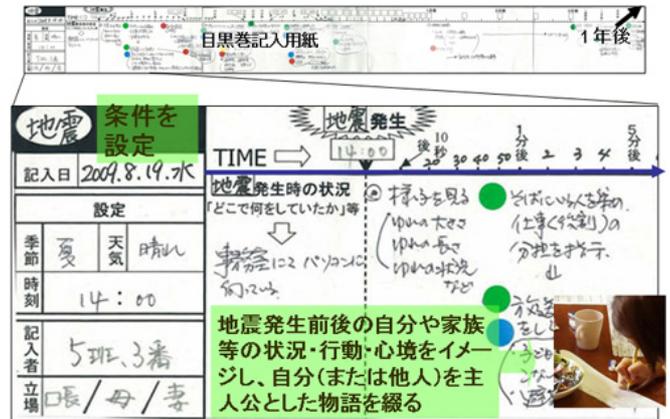


図1 目黒巻の設定と記入

の後、時系列に沿って並べた目黒巻を土台に参加者間で話し合うことにより、防災イメージーションおよび疑問や不安、課題が共有され、集団としての防災イメージーションが向上する（図1）。以上の「目黒巻ワークショップ（目黒巻WS）」の設計および実践による検証を行った。設計の詳細に関しては参考文献1を参照されたい。

2. WSの実践と成果

筆者らは2004年11月から2005年1月にかけて、保育園を中心とする様々な集団で約20件の目黒巻WSを実践してきた。とくに東京都世田谷区のモデル保育園では、数回にわたる目黒巻WSの実践と経過観察を行ってきた。これらの実践によって、以下の結果が導かれた。

A. 地震発生時の状況に影響を与える諸要因（特性）を考慮した上で、各々の参加者が自分を主人公とする災害発生時の物語を時系列上に記述する作業により、記述者の災害イメージーションが形成されると同時に、疑問や不安、課題も顕在化することが確認できた（図2）。

B. 目黒巻WSにおいて、目黒巻記述後に時系列

キーワード 乳幼児, 保護者, 保育士, イメージーション, ワークショップ

連絡先 〒153-8505 東京都目黒区駒場4-6-1 東京大学生産技術研究所 Be-604 目黒研究室 TEL 03-5452-6437

<http://risk-mg.iis.u-tokyo.ac.jp/meguromaki/meguromaki.html>

に沿って並べた互いの目黒巻を土台として参加者間で話し合うことにより、災害イメージーションおよび疑問や不安、課題が共有され、集団としての防災イメージーションが向上することが確認できた。WS参加者は目黒巻記入を通して「自分自身の防災の現状を再認識する」ことができていた。また、互いの目黒巻がその後の話しあいのベースになることで、和気あいあいとした活発な話し合いができ、満足度も高いことが確認できた。

C. 世田谷区のモデル保育園における目黒巻WS実践とその後数年間の経過観察により、WSがハード面・ソフト面の防災対策を進展させるきっかけとなることや、定期的・自主的に目黒巻WSを実施して頂けること、定期的な実践によって園の職員・保護者の間で、乳幼児を守り育てる防災文化が育っていく状況が確認できた。また、WSの企画や、WSにおいて重要な位置を占めるファシリテーター(進行役)は、いったん目黒巻WSを体験した保育園職員が務めることも可能であることが検証できた(図3)。

D. 目黒巻WSは保育園に限らず、幼稚園や高齢者福祉施設、企業、家庭、病院等、多種多様な場で気軽に行ってもらえることが確認できた。これら様々な場でのWS実践により、WSプログラムやツールのバリエーションが増え、プログラム設計の際に考慮すべきポイントが健在化した。

E. 保育園職員や保護者らが地震防災イメージーションを共有・向上するための「参照用災害状況ストーリー」のモデル例の作成とWSでの実践検証により、有効性や課題が確認できた。

F. 園長・主任向け危機管理研修会(2009年8月)での実践によって、目黒巻が、集団内部の打合せだけでなく、集団の代表者間の打合せにも有効なツールであることが確認された。また、保育園の安全に関する様々な不安を洗い出す「不安の棚卸WS」と組み合わせることで目黒巻WSを行うことで、顕在化した地震に関する不安がより具体化する様子が確認できた(図4)。

3. まとめと今後の課題

本論文では、過去5年間にわたる目黒巻WS実践の成果を概説した。今後、保育園等で目黒巻WSを普及させるためには、WS実践をサポートする環境を更に整える必要がある。WSをスムーズに園で実施する

ための研修プログラムセットや、WS中に講師が参加者の質問に応じるためのQ&A・ヒント集(園独自の生活パターンや危険性についても考慮したもの)を、これまでに得たデータを土台に準備することが求められる。将来的には対象とする危険を地震以外にも拡張し、保育園においてイメージーションを土台とした包括的な危機管理対策を行うためのサポート環境を整えていきたい。

参考文献

- 1) 阿部真理子, 目黒公郎: 保育園等の防災力向上に貢献する防災ワークショップ(目黒巻WS)の提案、生産研究、Vol.57、No.6、pp.34-38、2005.

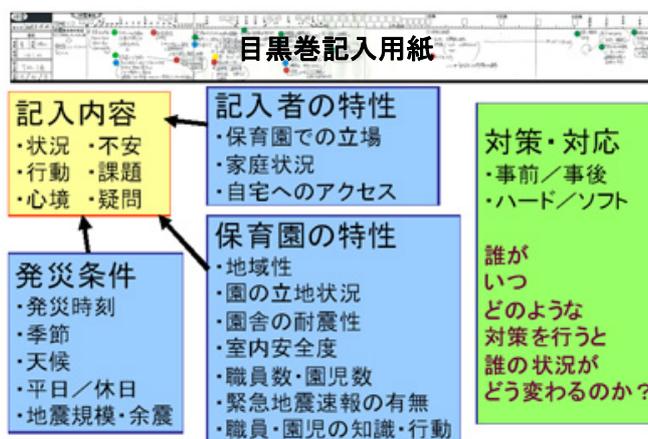


図2 記入内容に影響を及ぼす因子



図3 モデル保育園での目黒巻WS風景

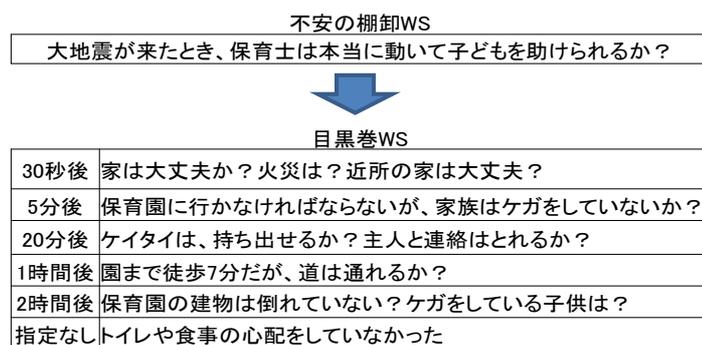


図4 不安の具体化例